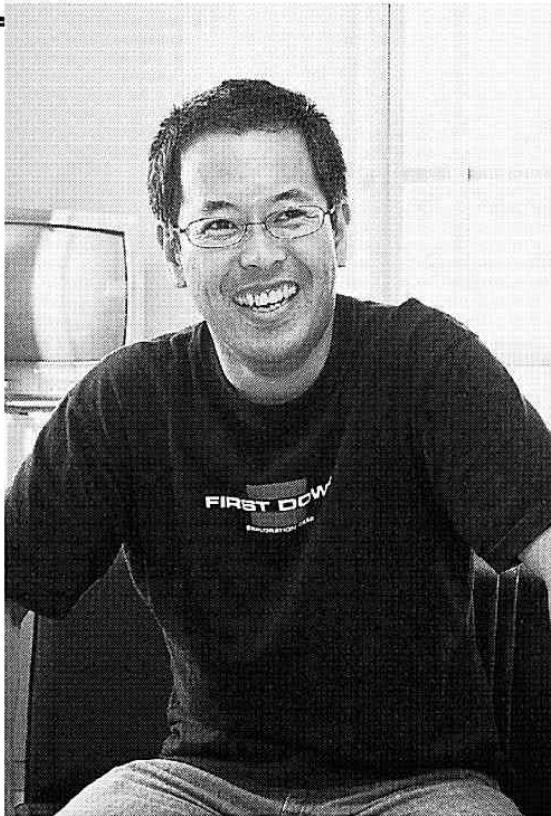


高齢者に弁当を宅配 さぼーとセンタースーパーパロ所長

あんざい 安齊 尚朋さん(36)



「地域の理解と協力も事業を始める後押しになった」と話す安齊さん

障害者の笑顔うれしい

夕張市内の高齢者向けの弁当宅配事業「さぼーとセンタースーパーパロ」を8月に始めた。障害者に働く場を提供しながら、一人暮らしのお年寄りに栄養バランスを考えた食事を届けている。「障害がある人とお年寄りの笑顔を見られるのが何よりうれしい」と、やりがいを感じている。

障害者10人が登録し、常時3〜4人が働く。事業拠点の夕張市平和のゆうばりはまなす会館で、ほかのスタッフやボランティアとタッグやボランティアとして

もに午前9時から調理し、昼ごろに高齢者宅に一食500円で弁当を宅配する。1日当たりの利用者数の目標は100人だが、いまは10人程度。「スタッフを増やして、着実に目標に到達したい」と意気込む。

の子どもを持つ母親から「自分が死んだら子どもはどうなるんだろう」という不安を聞き、「障害者が安心して働ける場が必要だ」との思いを強めた。

さらに、地域住民や民生委員などの話から、夕張で

町のNPO法人「当別町青少年活動センターゆうゆう24」に相談したところ、事業に賛同してもらい、事業のアドバイスや資金援助を受け、事業を始めることができた。

7月に同法人のメンバーになり、今後は障害のある子どもを一時的に預かるサービスマも視野に入れていく。「障害者が安心して暮らせる環境をつくりたい」。夢に向かってまい進している。(田島工幸)

千葉県習志野市生まれ。5歳で旭川市に引っ越し、拓殖大学北海道短期大学(深川)を卒業後、1994年、夕張市の障害者福祉施設「清水沢学園」に生活支援員として就職した。他のスタッフが障害者とごく自然に接する姿に感動し、「自分も障害者に寄り添って生きたい」と仕事に打ち込んだ。

は、一人暮らしのお年寄りが、交通事情の悪さから頻繁に買い物にも行けず、インスタント食品に頼りがちなことを知った。「障害者が弁当を作って、お年寄りに宅配すれば、両方の問題を解決できる」と事業化を決意し、今年3月に清水沢学園を退職した。

働ける場必要

転機は昨年9月。障害者

一時預かりも

高齢者や子ども向けに福祉事業を行い、はまなす会館を管理する石狩管内当別

ひと空知